

グローバル・フィランソロピーの進展と 助成手法の新展開

——海外助成財団の最新動向を踏まえて——

2014年2月13日

「助成財団の集い」発表資料

小林立明

(tatsuaki.kobayashi@gmail.com)

グローバル・フィランソロピーの進展と助成手法の新展開

1. 基本概念の確認
2. グローバル・フィランソロピーの進展
3. グラント・メイキング手法の新展開
4. グローバル・フィランソロピーの発展基盤
5. 日本の助成財団セクターのさらなる発展のために

フィランソロピー

➤ 「人類への愛」を意味するギリシャ語を起源とする言葉

- ・ 広義の用法
様々な社会的主体による貨幣、財、サービス、労働等の無償の提供を指す。
- ・ 狭義の用法
専門的に助成を行う財団や企業、個人とその活動を指す場合もある。(例:フィランソロピー・セクター)
- ・ 「フィランソロピーのフロンティア」
一定の対価を求める資金提供を「フィランソロピーのフロンティア」として、フィランソロピー活動の一環として認めようという議論が始まっている。(例:社会的企業などに対する社会的投資)

助成とグラント・メイキング

➤ 助成

- ・ 基本的には、資金が不足している非営利団体や個人に足りない資金を提供することを通じて、その活動を「助ける」という意味合いが強い。
- ・ 「非営利」「収支均衡」「プロジェクト支援」中心

・ グラント・メイキング

- ・ 対価を求めない資金提供を行うというのが基本的な意味。しばしば「Support」ではなく「Invest」という言葉が使用される
- ・ 「ミッション・目標の達成」中心

助成財団と助成団体

➤ 助成財団

- ・ 「(1)個人や団体が行う研究や事業に対する資金の提供、(2)学生、留学生等に対する奨学金の支給、(3)個人や団体の優れた業績の表彰と賞金等の贈呈、の3つの領域において 事業を行う団体」
- ・ 新公益法人制度における財団法人(一般・公益)以外に、社団法人(一般・公益)や社会福祉法人等、制度上は財団法人以外の公益法人であっても活動内容が同等なものは「助成型財団」に含められる。他方、特定非営利活動法人、独立行政法人(旧特殊法人)、公益信託、企業(内部基金含む)等は「助成型財団」から除外。(助成財団センター)

・ 助成団体(グラント・メイカー)

- ・ グラント・メイキングを中心的に行う団体一般
- ・ 助成財団に加えて、特定非営利活動法人、公益信託、企業+ドナー・アドバイズド・ファンド、市民ファンド、オンライン寄付プラットフォーム等を含む。

グローバル・フィランソロピーの進展と助成手法の新展開

1. 基本概念の確認
2. グローバル・フィランソロピーの進展
3. グラント・メイキング手法の新展開
4. グローバル・フィランソロピーの発展基盤
5. 日本の助成財団セクターのさらなる発展のために

1990年代以降の進展: 3つのポイント

1. 助成財団セクターの発展

- ・ 90年代以降、欧米ともに助成財団は資産、助成額共に拡大
(※これに対し、日本の助成財団は、資産額で拡大しているが、助成額は減少傾向)

2. 助成財団以外の多様な助成団体の登場・発展

- ・ ドナー・アドバイズド・ファンド
- ・ オンライン寄付プラットフォーム
- ・ 市民ファンド 等

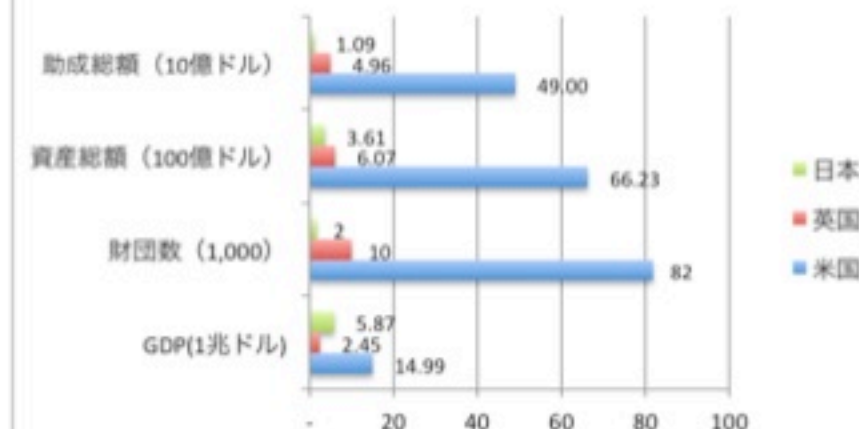
(※日本でも、特定寄附信託制度導入、市民ファンド推進連絡会設立、オンライン寄附プラットフォーム設立など同様の動き)

3. グローバル・フィランソロピーのネットワーク化と地理的拡大

- ・ グローバル・フィランソロピー・ネットワーク形成に向けた動き
 - i. グローバル・フィランソロピー・リーダーシップ・イニシャチブ
 - ii. WINGS (Worldwide Initiatives for Grant-maker Support)
- ・ 地理的拡大
 - i. アジア各国でフィランソロピー・セクターが発展。ナショナル・ネットワーク設立の動き
 - ii. 中東アフリカでもフィランソロピー・セクターが登場。地域ネットワーク設立の動き。
(※日本の助成財団セクターは、この中でプレゼンスを十分に示すことが出来ていない。)

1. 海外における助成財団セクターの発展

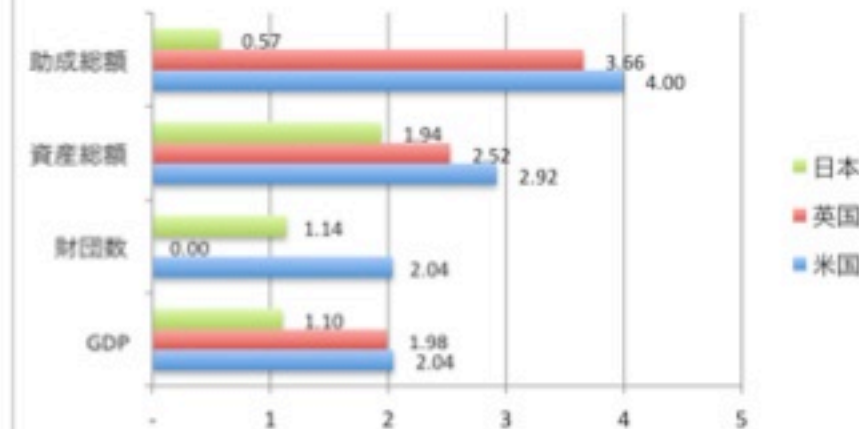
日英米助成財団セクターの規模比較



- 助成総額、資産総額、財団数共に米国が圧倒的に大きい。
- 日本の助成財団セクターは、GDPで半分程度の英国と比べても小規模。
- まとまった統計はないが、欧州共同体においても、2005年時点で、95,000以上の財団が活動と推定されている。15カ国55,552財団を対象とした調査では、総資産2,370億ユーロ、総支出額460億ユーロというデータあり。

(JFC Views Nov. 2013, No. 78より)

日英米助成財団セクターの成長率比較



- 1995年から2011年にかけての助成財団セクターの成長率を比較すると、米国、英国共にGDP成長率を上回る成長を達成している。
- これに対し、日本の助成財団セクターは、財団数はほぼ横ばい、資産総額は増加しているが、助成総額は減少という状況。

(JFC Views Nov. 2013, No. 78より)

2. 多様な助成団体の登場・発展

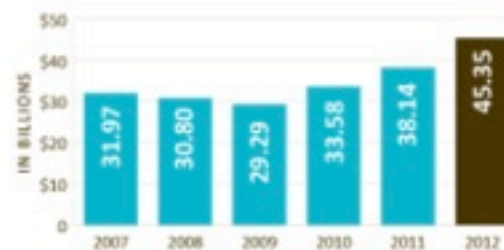
例1: ドナー・アドバイズド・ファンド

- 米国における寄附信託制度の一つ。寄附者は専門機関やコミュニティ財団などの非営利団体が用意したファンドにそれぞれ口座を開設し、ここに資金を寄附する。但し、他の一般寄附や特定寄附と異なり、ドナー・アドバイズド・ファンドの利用者は、寄附金の運用先や寄附のタイミング、寄附の対象となる非営利団体を比較的柔軟に選択することが出来る。
- 従来より、コミュニティ財団を中心に利用されていたが、1990年代に入り、フィデリティなどの大手金融機関の参入が認められたため、大きく発展した。ナショナル・フィランソロピック・トラストのような全国レベルで活動する非営利のドナー・アドバイズド・ファンドも登場した。
- 財団を設立するよりも管理コストが低いこと、比較的少額の寄付から始めることが出来ることなどの理由により、近年、増加している。

寄附口座数の推移

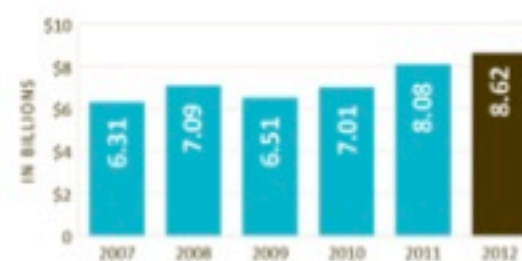


資産総額の推移



(単位: 10億ドル)

グラント総額の推移



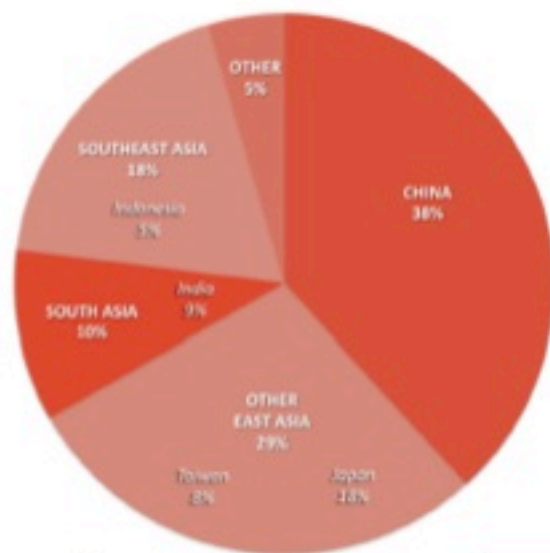
(単位: 10億ドル)

2. 多様な助成団体の登場・発展(続き)

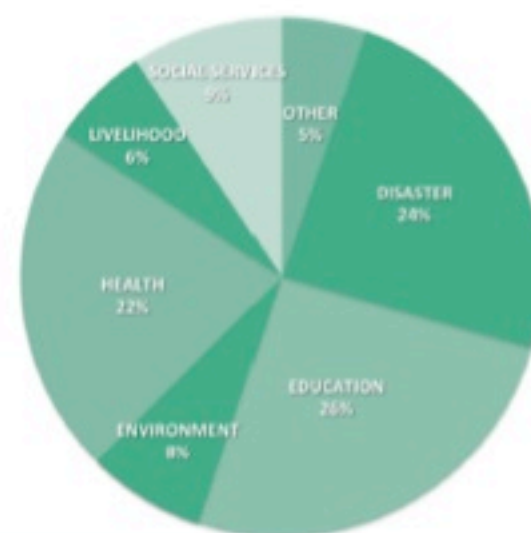
例2: Give2Asia(オンライン寄附プラットフォーム)

- オンライン上にアジア各国の非営利団体を支援するファンドやプロジェクトの情報を掲載し、それぞれに対して、企業、財団、一般等からの寄付を募るオンライン寄附プラットフォーム。2001年以来、2億3700万ドルの寄附を集めた。
- 2012年度の寄附総額は3,014.8万ドル。年初の資産総額は923.5万ドル。2013年度にはアジア24カ国を対象に、総額3,116.6万ドル、563のグラントを出した。
- 2011年の東日本大震災の際には800万ドルの寄附を集め、緊急支援、経済復興、保健医療、教育などの分野における支援を行った。

地域別グラント比率(2013年度)

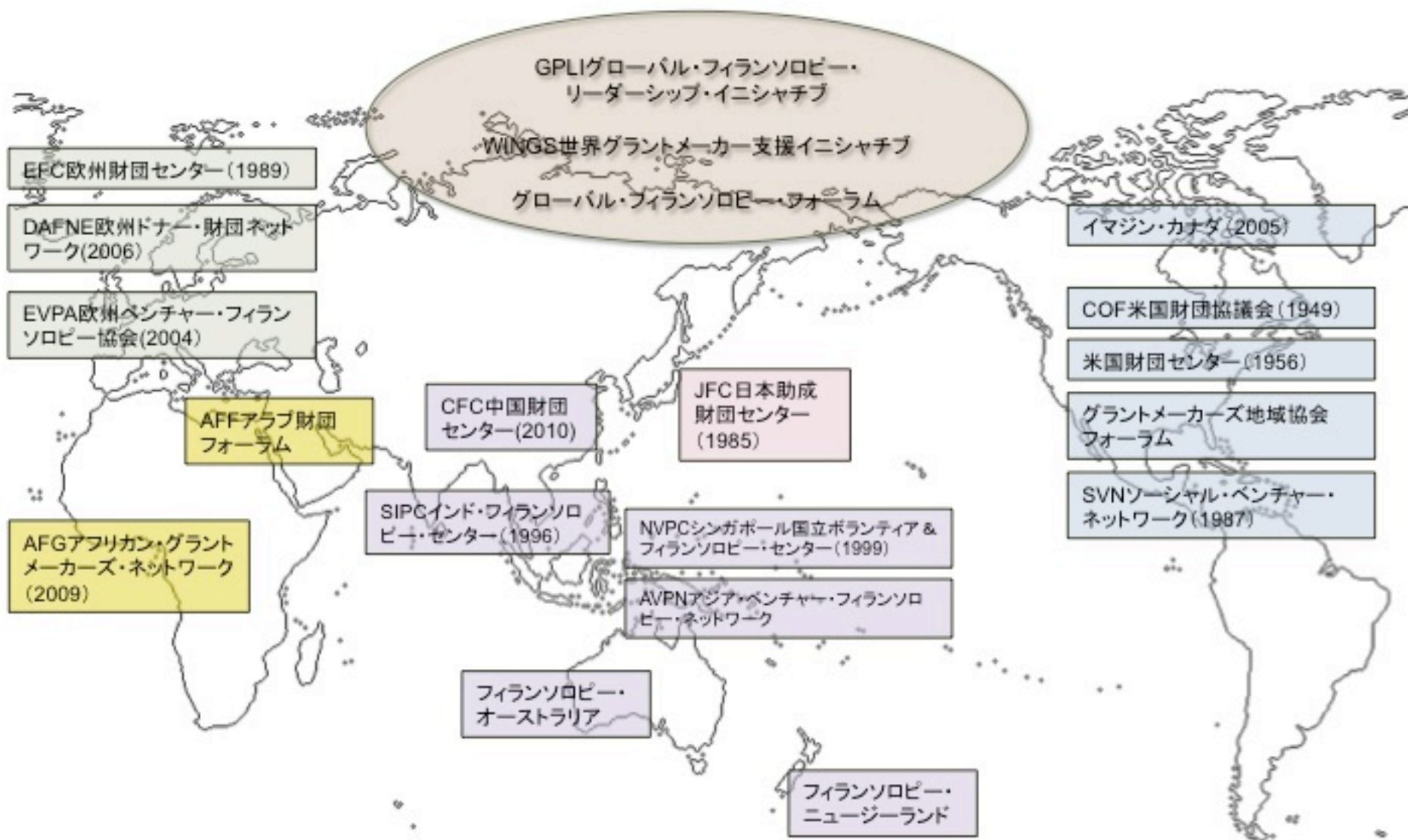


分野別グラント比率(2013年度)



Give2Asiaウェブサイト掲載情報より

3. グローバル・フィランソロピーの発展



(参考)「フィランソロピーのフロンティア」の登場

「フィランソロピー」の再定義:
社会的、環境的目的に向けた、民間資源の動員

伝統的フィランソロピー

フィランソロピーのフロンティア

支援
主体

助成財団
個人

社会的インパクト投資家
銀行、企業、コミュニティ開発金融機関

支援
手法

グラント・メイキ
ング、寄附

社会的インパクト投資、
マイクロファイナンス
コミュニティ開発金融、企業の社会貢献

支援
対象

非営利団体

社会的企業
マイクロファイナンス団体
コミュニティ・ビジネス団体

グローバル・フィランソロピーの進展と助成手法の新展開

1. 基本概念の確認
2. グローバル・フィランソロピーの進展
3. グラント・メイキング手法の新展開
4. グローバル・フィランソロピーの発展基盤
5. 日本の助成財団セクターのさらなる発展のために

多様に発展するグラント・メイキング手法

戦略的グラント・メイキング (Strategic Grant-making)

- 事業計画策定～実施～評価～事業見直しという一連のプロセスを事業実施効果の最適化という観点から体系的に整理・モデル化したもの。
- 「ロジックモデル」を核とする。

ベンチャー・フィランソロピー (Venture Philanthropy)

- 革新的なビジネス・モデルを持った団体を厳選し、一般管理費や人件費なども含めた大規模・中長期的な資金提供を通じて団体の経営基盤強化やスケール・アップを支援し、これによってより持続可能でインパクトのある事業を実現しようという手法。
- ベンチャー・キャピタルの手法を取り入れ、資金面以外での経営支援やネットワーク形成支援などを行う点に特徴がある。

触媒型フィランソロピー (Catalytic Philanthropy)

- グラント・メイキング団体が「触媒」の役割を果たすことで、異なるセクター間の協働を組織し、社会を変革することを通じて目的を達成しようという手法。グラント・メイキング団体が、資金支援以上のより積極的な役割を引き受け、多様な利害関係者を巻き込んだクロス・セクター間の協働を組織することを目指す。
- その際、セクター間で共有可能な成果達成度の測定指標設定、強力な調整機能を持った事務局の設置、アドボカシーやロビー活動、施設・人材の提供などを行う点に特徴がある。

共同ファンディング (Co-funding, Mixed-funding)

- グラント・メイキング団体が共同で資金提供を行う手法。
- 複数の財団がコンソシアムを組み、情報交換を行いながら特定の領域に共同で支援を行うものや、さらに進んで共同基金を設立し、これを通じて支援を行うものなど、様々な手法が試みられている。

多様なフィランソロピー手法(ケース・スタディ)

- ある湖で近年、漁獲量が急激に減少し、現地の漁民が極度の貧困状態に陥ったことを知ったフィランソロピストが支援に乗り出した。
- 漁民は、伝統的な漁法しか知らず、魚の販売もコミュニティのみ。漁獲が減少した原因は不明だが、上流域に出来た化学工場の影響ではないかと人々は疑っている。

共同ファンディング

- グラントメーカー間の共同
- 基金を通じた多角的支援

触媒型フィランソロピー

- セクターを越えた協働の推進
- 行政、企業、コミュニティの関与

ベンチャー・フィランソロピー

- 社会的企業的手法への支援
- 魚の保存・加工・流通支援

戦略的フィランソロピー

- ロジックモデルの作成
- 漁法の改善・トレーニング

フィランソロピー

- 漁民の自立化を支援
- 釣り具の購入支援

慈善(チャリティ)

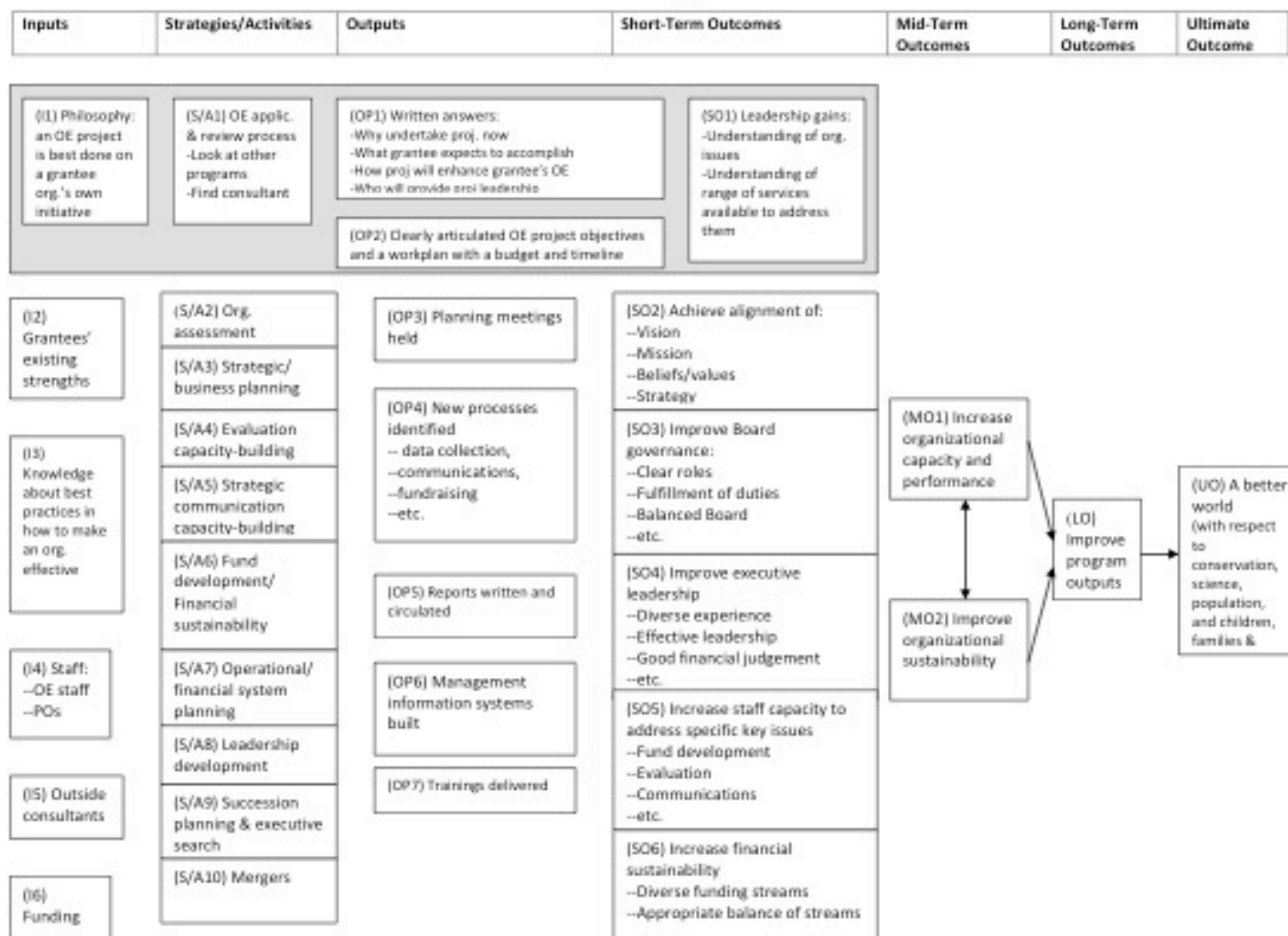
- お金や食べ物を与える



1. 戦略的グラント・メイキング

例1: パッカード財団の「効果的組織作り」プログラムのロジックモデル

Logic Model for the Packard Foundation's Organizational Effectiveness (OE) Responsive Grantmaking
Version of 5/17/05



2. ベンチャー・フィランソロピー

ベンチャー・フィランソロピーの手法



目的

ベンチャー・フィランソロピーは、
 1) 社会的インパクトを高めるために、
 2) 資金支援及び非資金支援の
 双方を提供することで、
 3) より力を持ったソーシャル・セ
 クターの確立のために、
 活動を行う。

特徴

1. 厳選した団体に対する、深く
コミットした支援
2. キャパシティ・ビルディング支
援
3. ニーズに応じた資金支援
4. 資金以外の支援
5. ネットワークへの参加
6. 複数年度にわたる支援
7. 業績測定指標の導入

3. 触媒型(Catalytic)フィランソロピー

例: ヒルトン財団の「持続可能で安全な水資源アクセス」(WASH)事業



目標

1. 100万人に安全な水を提供
2. 財団事業地域で上下水道システムが少なくとも90%増加
3. ミレニアム開発目標における水分野での目標達成
4. 安全な水、コミュニティ衛生に加えて、貧困削減にも取り組む(WASH+)

触媒型フィランソロピーへ

FSGの協力による 戦略策定

従来の支援

- ・地域限定(アフリカ、メキシコ、インド)
- ・手法限定(井戸掘り、水質改善)
- ・対象限定(安全な水+コミュニティ衛生)
- ・資金限定(単独支援。過去20年間で8000万ドルのグラント)

手法

1. 上下水道システムの改修・維持のための市場メカニズム/補助金システムの開発。
2. コミュニティと家庭における安全な水確保能力の強化
3. 安全な水確保に向けたネットワーク形成とアドボカシー
4. WASHプログラム向けのマイクロファイナンス制度開発
5. WASHプログラムを担う地域指導者育成
6. WASHプログラムの効果を最大化する調査、評価、データ・システムの提供
7. 国際的なWASHプログラム標準化のための評価/報告システムの開発と導入

→他の財団や支援団体との協働を促進するため、情報集約・共同プラットフォームとしてWASH funders.orgを開設

4. 共同ファンディング (Co-funding, Mixed-funding)

共同ファンディング主要事例

名称	プログラム概要	参加財団
「無視されている熱帯病 (NTD) に関するアフリカ研究促進のための欧州財団イニシャチブ」 (共同イニシャチブ型)	- HIV/AIDSなどに隠れて無視されている熱帯病の予防/治療に向け、アフリカ人自身の研究能力を向上させる。WHOのNTDイニシャチブに呼応して設立。 - 若手研究者や、今後、大規模の研究プロジェクトを計画している中堅研究者に対し、3年間のフェローシップを供与。	The Nuffield Foundation (英) Fundação Calouste Gulbenkian (ポルトガル) Fondation Mérieux (仏) Volkswagen Stiftung (独) Fondazione Cariplo (伊)
気候・土地利用連合 (コンソーシアム型)	- 気候変動問題を踏まえ、熱帯雨林の保護、熱帯雨林資源に対する現地住民のアクセス・権利の向上、このための国際支援資金の効果拡大等を目的とする。 - この目的を達成するために、4つの優先地域(ブラジル、インドネシア、メキシコ・中米、米国)のプロジェクトとグローバル・プロジェクトを支援。	The ClimateWorks Foundation The David & Lucile Packard Foundation The Ford Foundation The Gordon and Betty Moore Foundation The Margaret A. Cargill Foundation (事務局) (総て米国の財団)
バルカン民主化基金 (基金型)	- バルカン諸国の民主化を支援するため、米国ジャーマン・マーシャル基金、米国開発庁、チャールズ・スチュワート・モット財団の協力により設立された基金。その後、他財団からの資金協力を得て拡大。 - バルカン諸国の民主化のため、市民団体、NGO、政府機関、教育機関、メディア等の活動を支援。	German Marshall Fund US (米) Charles Stewart Mott Foundation (米) Copagnia di San Paolo (伊) Robert Bosch Foundation (独) Rockefeller Brother Fund (米) その他、米国開発庁など主要国開発援助機関
リビング・シティズ (プラットフォーム型)	- 米国の貧困コミュニティにおける様々な課題を解決するため、米国の主要財団と金融機関をメンバーとして1991年に設立された中間支援団体。 - リビング・シティズを共同プラットフォームにして、調査・研究、各種イニシャチブの下でのグラントや社会的投資、自主事業などを行っている。	Bill & Melinda Gate Foundation The Rockefeller Foundation Ford Foundation The MacArthur Foundation Citi Foundation The Annie E. Casey Foundation その他、Bank of America等の金融機関

(参考)「フィランソロピーのフロンティア」への助成財団の参画

「フィランソロピーの新たなフロンティア」時代において、助成財団が取りうる4つのモデル

- ペンチャー・フィランソロピーの手法を活用して、社会的企業を支援

ペンチャー・
フィランソロピー

- 触媒型フィランソロピーの手法を活用してセクターを超えた協働を組織。これにより、民間資金をフィランソロピーに誘導。

触媒型
フィランソロピー

- 社会的インパクト投資が持続可能な「産業」として成立するよう、基盤を整備。

基盤整備

投資

- 財団資産を、プログラム関連投資、ミッション関連投資、社会的責任投資に活用することを通じて社会的企業や社会的インパクト投資を支援。

グローバル・フィランソロピーの進展と助成手法の新展開

1. 基本概念の確認
2. グローバル・フィランソロピーの進展
3. グラント・メイキング手法の新展開
4. グローバル・フィランソロピーの発展基盤
5. 日本の助成財団セクターのさらなる発展のために



グローバル・フィランソロピーの進展と助成手法の新展開

1. 基本概念の確認
2. グローバル・フィランソロピーの進展
3. グラント・メイキング手法の新展開
4. グローバル・フィランソロピーの発展基盤
5. 日本の助成財団セクターのさらなる発展のために

助成財団の課題：経営のイノベーション

- ・ 助成プログラムの内容と助成先選定の的確性が助成財団の意義。このためには専門性の向上が必要。
- ・ プログラム・オフィサー制度
- ・ 外部の「目利き」
- ・ 資金運用と資金集めの専門家

専門性

- ・ 助成対象者は顧客であると同時にミッションを達成する協力者。顧客満足度の向上が望ましい。
- ・ 決定プロセスの迅速化
- ・ 年二回募集
- ・ 管理費用支援
- ・ 共同助成による包括的助成先払いや中間支払制度の導入

顧客志向

「民間助成イノベーション：制度改革後の助成財団のビジョン」（助成財団センター編（2007））
「第9章 助成財団を取り巻く環境変化と助成財団の課題」（今田忠）より

ガバナンス

情報公開・
説明責任・
評価

- ・ 新公益法人制度で、評議員会と監事の設置の義務化や理事会における親族・利害関係者の制限などガバナンス強化
- ・ ガバナンスの強化は歓迎
- ・ 但し過度の重視の危険性にも留意

助成先と助成金額の積極的な情報公開を！

- ・ アカウンタビリティ確保のため研究助成財団は研究成果の公開を！
- ・ 評価部門設置が困難であれば、プログラム改訂の際に外部評価を！

さらなる発展のために。。。

1. **グラント・メイキングの戦略性の向上**
 - ・ 戦略的グラント・メイキングの導入(ロジック・モデル、インパクト志向、評価)
2. **他の助成団体や政府・企業との連携強化**
 - ・ 助成財団相互のネットワーク強化、パートナーシップ形成
 - ・ NPOや市民ファンドとのパートナーシップ
 - ・ 企業CSR・CSVとの連携
 - ・ 政府・公的機関・国際機関とのパートナーシップ
3. **助成財団セクターの社会的意義の積極的発信**
 - ・ 情報公開・説明責任からさらに一步踏み込んだ広報へ(「見える化」)
 - ・ 助成財団セクター全体としての役割や成果に関する情報を発信
4. **海外助成財団セクターとの交流強化**
 - ・ グローバル・フィランソロピー・ネットワークへの参画
 - ・ アジア助成財団ネットワーク形成に向けた貢献
5. **以上を支える中間支援団体の拡大・強化**
 - ・ 助成財団センターの強化
 - ・ グラント・メーカー地域ネットワークの確立

(参考1)フィランソロピー実践のための七つの鍵

1. あまねく平等にではなく、優先順位を持って、深く、且つ、きめ細かく対応すること
2. 前例にこだわることなく、新たな創造に取り組むこと
3. 失敗を恐れずに速やかに行動すること
4. 社会に対して常にオープンで透明であること
5. 絶えず自らを評価し、自らを教育することを忘れてはならない
6. 新しい変化の兆しをいち早く見つけてそれへの対応をすること
7. 世界中に良き人脈を開拓すること

(参考2)フィランソロピー原理の再構築

1. 「非営利組織の機能は市場の失敗と政府の失敗に対応することというのが一般的な理解と言って良いと思う。基礎的な学術研究、質の高い芸術文化、肌理の細かいヒューマン・サービス等は市場でも政府でも対応できない。市民一人ひとりが充実感をもって生活を送るためには、非営利組織や学術研究を支えるフィランソロピー原理が社会に定着していなければならない。」
2. 「現代のフィランソロピーは一部の篤志家や大企業に任せてよいものではない。マーケット・ファンダメンタリズム——市場至上主義が受け入れられる風潮の現在こそ、個人一人ひとりがフィランソロピー原理を理解し精神性豊かな社会の構築に努力すべきであろう。フィランソロピーの原義は人類愛であるが、現代のフィランソロピーは、社会が必要としている公益活動を資金的に支援することである。もちろん人類愛が基本にあるのであるが、現代社会で求められているフィランソロピーは、公益ニーズにどのように応えていくかという社会システムである。」
3. 「本書で見てきたように資金提供者と資金需要者をつなぐインターメディアリの多様化が進んでいる。このような状況にあって、フィランソロピー専門機関である助成財団は何をなすべきか、助成財団センターの役割も問い直されることになる。助成財団センターも「助成財団」という枠に捉われずに、現在におけるフィランソロピーの重要性について発言していかなければならないと思う。そのための調査活動、政策提言活動もセンターの重要な課題だと思う。」

(参考3)助成財団は新しい時代をどう迎えるか？

1. 「春」の予兆：公益法人制度の改革により、助成財団界に新しい風が強く吹き始める。
 - ・ 既存の財団の改革（事業目的の再検討や助成プログラムの見直し）
 - ・ 新しい財団の設立（財団設立が簡便に。小さな基本財産で設立することも、基本財産を取り崩しながら時代にインパクトを与えるような運営をすることも可能。募金を重視した多目的なコミュニティ財団など、新たなスタイルの助成財団が登場するかもしれない。）
2. 資金仲介組織の中における助成財団の位置づけとは？
 - ・ 助成財団は「モノ・スポンサー（資金提供者が単一か同質の寄付者）」で「ストック型（資金源が金融資産収入）」が特徴。「マルチ・スポンサー（複数の賛同寄付者）」や「フロー型（寄付金収入）」ではない。
 - ・ このため、助成財団は、フローでマルチな資金源では対応しにくいテーマへの対応が求められる。
3. 沈黙の春にならないために：助成財団への期待
 - ・ 科学技術研究への助成を行っている団体には、科学と社会を結ぶ接点での役割を重視して欲しい。特にそのためのNPOを育てて欲しい。（独自研究、啓蒙・教育、動向監視、科学技術がもたらす社会的課題に対しての解決策の模索・提案・行動）
 - ・ 福祉・教育・文化・芸術・環境・まちづくり支援財団には、その分野全体の長期的な基盤を強化するようなNPOの取り組みを育てて欲しい。（長期的な視点からその土台を作るような、やがて新しい運動を巻き起こすような、すぐには見えにくい活動への支援。特に、政策提言的な活動や社会変革の種になるような活動。市民の調査研究能力の向上。）
 - ・ 以上は、専門家や専門的な組織への助成から、市民や市民組織への助成へとシフトすることを意味する。その際、人件費を含む組織運営費への助成に取り組んで欲しい。（人も組織も育つ助成）
 - ・ 助成財団界とその周辺に助成活動の専門性を高めるような人材を育ててほしい。

「民間助成イノベーション：制度改革後の助成財団のビジョン」、「特別寄稿 助成財団は新しい時代をどう迎えるか」（山岡義典）より

(参考3)助成財団は新しい時代をどう迎えるか？(続き)

沈黙の春にならないために(続き)

1. 「個々の財団で専門性を高めることが出来ればそれにこしたことはないが、財団の規模から言っても、また日本の財団における人材登用の仕組みからしても、実際には各財団の中で専門性を育てることはなかなか難しい。複数の財団の課題に対応できるようなコンサルティング機能を、個別財団の周辺に充実させていくことが、現実的であろう。」
2. 「この点に関しては、助成財団センターの役割も大きい。センター自体が専門性を増すことも重要だが、むしろそのコーディネーションの役割が期待される。そのためには、複数財団をマルチクライアントとするような調査研究活動を通じて人材のネットワークを広げ、そのネットワークを育てていくことが重要だろう。個々の財団には、必要なコンサルテーションに対しては、それに見合うコストを支払う努力もしてほしい。個々に悩んでいても、解決には限界がある。」
3. 「特にこの公益法人制度改革への対応を真の意味での財団ルネッサンスにしていけるためにも、必要な専門性を財団界全体で育てていくことが、切実に求められる。そのことがなければ、春はいつまでも沈黙したままかもしれない。」

(参考4) 主要財団のフィランソロピー発展に対する貢献例

財団名	主要プログラム例	関連サイト
フォード財団 (米国)	1990年代にグラント・クラフトを通じてグラント・メイキングに関連した様々な手法やノウハウを一般に公開。 「民主的で説明責任を果たす政府」事業の一環として、開発途上地域における市民社会とフィランソロピー強化のためにグラントを提供。	http://www.grantcraft.org/ www.fordfoundation.org/issues/democratic-and-accountable-government/strengthening-civil-society-and-philanthropy
ロックフェラー財団 (米国)	1990年代にグローバル・フィランソロピー・プログラムを通じて世界のフィランソロピーの発展を支援 2007年より、新たに「インパクト投資」イニシアチブを立ち上げ、「フィランソロピーのフロンティア」領域における政策提言、調査、中間団体設立などの事業を支援。	(ウェブサイトなし) http://www.rockefellerfoundation.org/our-work/current-work/impact-investing
ヒューレット財団 (米国)	「効果的なフィランソロピー」プログラムを通じて、フィランソロピー研究・調査へのグラントを提供したり、成果志向型グラント・メイキングに関する資料を作成・公開するなどの活動を行う。	http://www.hewlett.org/programs/effective-philanthropy-group/improving-philanthropy
チャールズ・スチュワート・モット財団 (米国)	「グローバル・フィランソロピー&非営利セクター」プログラムを通じて、グローバル・フィランソロピーの発展に関するプロジェクトを支援。特に、コミュニティ財団の発展を重視した支援を行っている。	http://www.mott.org/FundingInterests/programs/civilsociety/globalandnonprofit
チャリティーズ・エイド財団(英国)	- 英国本部においては、「グローバル・ギビング・インデックス」や「UKギビング」など、様々な調査を実施・発表している。 - インドやロシアなどの拠点では、グラントを通じたフィランソロピーの促進に取り組んでいる。	https://www.cafonline.org
キング・ボードウィン財団(ベルギー)	- フィランソロピー・センターを設立し、内外のフィランソロピー関係者に対するコンサルティング・サービスを提供している。 - 欧州域内の国境を越えた寄附を促進するため、「ギビング・イン・ヨーロッパ」というウェブサイトを立ち上げ、情報提供を行っている。	http://www.kbs-frb.be/philanthropy.aspx?langtype=1033 http://www.givingineurope.org/

(参考5) 主要中間団体の概要

名称	概要	主要事業
米国財団協議会 www.cof.org	1949年設立。米国を中心に、内外の独立財団、事業財団、コミュニティ財団、企業財団、企業フィランソロピーなど1,700の会員を擁する。 - 正味資産額1,400万ドル。収入は1,695万ドル。主な収入源は会費収入(1,130万ドル)とグラント・寄附(253万ドル)。(2012年度)	- ワシントンDCフィランソロピーウィークの開催などを通じたセクター全体のアドボカシー - 主に会員を対象としたトレーニングやコンサルティング - フィランソロピーに関する調査・研究と情報提供 - フィランソロピー分野でのキャリア情報の提供 - 国際的なフィランソロピーネットワークへの参加 等
米国財団センター foundationcenter.org	1956年設立。現在、約550の財団からの支援を得て、世界中のフィランソロピーの情報センターとして活動している。 - 正味資産額2,572万ドル。収入は2,317万ドル。主な収入源は、寄附(323万ドル)、出版収入(1,143万ドル)、プログラム収入(227万ドル)など。(2012年度)	- グラント・メイキングの改善や協働促進のため、様々なリソースやツールを提供 - 財団ディレクトリや財団ガイドなどの調査・情報提供 - グラントを求めるNPO向けにファンド・レイジング・トレーニングやデータベース情報の提供 等
フィランソロピー・ニューヨーク www.philanthropynewyork.org	1979年設立。現在、285財団が加盟しており、加盟財団向けに各種サービスを提供している。 - 正味資産額300万ドル。収入は458万ドル。主な収入源は、会費(191万ドル)、グラント(245万ドル)、プログラム収入(4,655ドル)、マネジメント経費(8.3万ドル)、賃料(5万ドル)など。	ニューヨークに拠点を持つフィランソロピー団体・個人の能力強化を目的に、資金提供者と受け手の協働の促進、戦略的で効果的なフィランソロピー促進のための情報提供やトレーニング、フィランソロピーに関する公的政策へのアドボカシー、ピアネットワーク形成支援、フィランソロピー指導者の育成などを行っている。
欧州財団センター www.efc.be	1989年設立。現在、欧州内外の233財団が会員となっている。 - 財務データは不明だが、基本的には会費収入と財団からの支援により運営されている。	欧州におけるフィランソロピー・セクターの強化のため、欧州財団法制定などに向けたアドボカシー活動、財団職員向けトレーニング、フィランソロピーに関する調査及び情報提供、ピア・ネットワークの形成、国際的なフィランソロピー・ネットワークへの参加等を行っている。
中国財団センター en.foundationcenter.org.cn	2010年に設立された公益法人。会員数等は不明だが、同センター設立合意書に署名した35財団が運営の核となっている。 - 財務データは不明だが、ゲーツ、フォード、アジア、ロックフェラー兄弟、メルカトルなどの海外の財団と国内の財団の支援を得て運営されている。	中国における財団セクターの発展のため、財団活動の透明性向上のための自主ガイドラインを制定した他、オンライン上の財団データベース情報の提供、財団マップ情報の提供及びアドバイス業務を行っている。

ご清聴ありがとうございました！

参考サイト

- ◆ フィランソロピーのフロンティア
http://japan-philanthropy-forum.net/public_html/frontier/wp/
- ◆ ジャパン・ソーシャル・イノベーション・フォーラム
<http://japan-social-innovation-forum.net>
- ◆ フィランソロピー・非営利・協働 情報ボックス
<https://www.facebook.com/InfoBoxOfPhilanthropy>